

## 第 10 回(令和 3 年度) 名古屋大学水田賞

馬路 智仁 『政治思想史における帝国と国際秩序

－ 20 世紀前半のイギリスを中心として』 講評

馬路智仁氏による本研究は、20 世紀前半期のイギリスを主対象とし、この時代の「帝国と国際秩序」の成立を支えた政治思想の特質を政治思想史的に明らかにしようとした先駆的独創的研究である。本研究は、まず、これまで研究が進んでいなかったアルフレッド・ジマーンの思想の全体像を再構成し、これを通じて、20 世紀前半期イギリスにおける「帝国と国際秩序」論の特質を明らかにしたことで、先駆的かつ画期的である。そして、この研究を、政治思想史の文脈に架橋したことにおいて、独創的である。

本研究において、特に高く評価できるのは、次の諸点である。第一に、リベラリズムを中心に置く政治思想史の研究文脈を意識し、ジマーンの国際関係論の基底に帝国とコモンウェルスの結合という思想的課題を発掘し再構成したことであり、第二に、その「帝国とコモンウェルスの結合」の構想の思想的源泉として、独自の古代ギリシャ史像と文化的シオニズムの存在を示し、それぞれが、市民的共和主義と多文化主義へと結実した経緯を明らかにしたことであり、第三に、特に市民的共和主義の成立について、アテネの共和主義がエドモンド・バークを介して近代化する文脈を明示したことである。そうして、さらに、本研究は、第四に、リベラリズムの研究文脈のみならず、ホブスンやホブハウスの帝国主義論や I.バーリンや E.H.カーの政治論などとの関連を視野におき、思想史研究の文脈拡大に寄与しようとしている。加えて、第五に、ケンブリッジ学派の思想史方法論にもとづく方法的一貫性と資料に基づく実証性の追求においてきわめて意欲的である。

本研究が切り拓きつつある新しい思想史の概要は、未開拓ではあるが、本研究が、政治史的研究を思想史的研究に結合するものとして画期的であって、思想史研究一般に対し独創的かつ問題提起的研究であることは明らかであり、第 10 回「名古屋大学水田賞」に値する業績であると判断するものである。